

異文化理解の場としての留学生別科

-対話の場を創るために-

留学生別科長 松井 かおり

2023年度の留学生別科は、通常の学年暦に沿って教務が運営され（2022年度は前期は5月半ばからの後ろ倒しスタート）、京都への学外研修、立食パーティー付きの新入生歓迎会など通常の方法ですべての行事が実施され、やっとコロナ禍以前の学習環境を取り戻すことができました。ここまで、別科の教職員・非常勤の先生方だけでなく、学長のご理解の下、学事一課、学事二課、入試広報課、総務課、国際化推進室、ならびに病院関係者の皆様から全学的に留学生別科の運営にご支援をいただきましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

2023年度の留学生別科は、2022年度から引き続き学生の多国籍ぶりは変わりません（ネパール、ベトナム、スリランカ、ミャンマー、バングラデシュ、中国、ウクライナ、タイ、アフガニスタン、ドイツ）。ウクライナから、新しく1名の避難民学生も受け入れました。来学年度はインドネシアから新入生を迎える予定で、さらに多国籍化は加速しそうです。

昨年度の別科紀要の巻頭に、「異文化理解は、学生にとっても教員にとっても常に自己の変容を迫られる行為であり、不安やストレスを伴う」と書きました。また「それを覚悟しつつ、だからこそ互いに関わることが楽しい、どう変わるかわからない自分たちの将来を楽しめる変革の機会として、学生（や教職員同士）とのやりとりを大切にしていけたら」とも書きました。しかし、どうしたら、そのやりとり、すなわち対話の場を創ることができるのでしょうか。

留学生教育の現場は、「正解」が示されないまま、次々と難しい場面への対応が迫られます。教務だけでなく、学生の病気、交通事故や警察案件は事例ごとに状況が異なり、前例や過去のルールは通用しませんし、避難民学生対応にはそもそも前例もありません。そういう中で教員は、様々な葛藤や不安、不満を募らせます。そのような不満や葛藤を愚痴や自己/他者への批判・攻撃へ向けるのではなく、各々が当事者として葛藤の経験を話し合い聞き合う場があれば、経験の言語化による課題の対象化と、現場に関わる人たちの課題の共有が可能となります。何よりひとつの状況においても、様々な「成解」（岡田，2008）があり得ることを知り、その中から、どの「成解」を選んでいくのかは、その状況において実践に従事している当事者のみが選択可能であることを再認識することができます。ここでいう「成解」とは、普遍的な真理である「正解」ではなく、「今」「ここで」成立可能な解を意味します。自分のことばで自分の体験を語り、他者の語りを傾聴する共同の場づくりは留学生教育の場では喫緊の課題だと考えます。

蛇足ながら、私は現在、外国人児童生徒の学習支援員たちとカードゲームを通して対話の場づくりをすすめています。「人それぞれ考え方が違うことにストレスを感じず、（状況を）客観的にも主観的にも考えることができた」「自分と違う意見の人の話をもっと聞きたいと思った」という参加者の声をききながら、リフレクションの場としても共同的対話が機能することに興味をもっています。